（書式２）

＜事務局使用欄＞受付番号：　　－

「２０２２年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部３年　永橋風香

今回のベトナム派遣では現地に行ってベトナム国家大学の学生と交流したからこそ自分にとって意義があったと思える様々な経験をすることができた。なかでも特筆したいのは、平和と戦争教育をテーマとして共同発表を行ったことだ。現地学生との交流を通して両国の戦争の歴史やその伝え方について考えることは、私がこの派遣プログラムに参加したいと思う最大の理由だった。きっかけとなったのは、10 月に個人的な旅行で韓国・ソウルへ行ったときに訪れた戦争記念館で、その展示のされ方に衝撃を受けたことである。当時は、その衝撃がすぐには言語化できず、強烈な違和感として印象に残ったが、帰国してから考えるうちに、戦争が誇りを持って伝えられていたからだと気づいた。原爆資料館やひめゆりの塔など日本で戦争に関する展示といえば、その悲惨さを後世に伝えるものだった。亡くなった人は皆犠牲者だった。それが、韓国の戦争記念館では秀吉の朝鮮出兵時代やさらにそれ以前までまで遡って、過去の戦争で活躍した人物が英雄と称えられその功績が誉れ高く描かれていた。繰り返し侵略されてきた朝鮮半島と、侵略や植民地支配をする帝国だった日本。南北に分断されそもそも戦争が終わっていない韓国と、1945 年の終戦がどんどん過去へと遠のく日本。戦争の歴史は一様に「二度と繰り返さないように」という誓いを持って伝えられるものではないのだと知った。

それでは、同様に国全体を巻き込む大きな戦争を経験したベトナムでは、戦争の歴史はどのように伝えられるのか。私と同世代の学生は、戦争や平和についてどのように考えているのか。その考え方は、学校教育や家庭での記憶の継承のされ方とどのように関係しているのか。ベトナム派遣のプログラムがあると知った時、このような問いが湧き応募を決めた。そして共同発表のテーマには「平和と戦争教育」を提案した。人文社会科学大学(USSH)の学生も外国語大学（ULIS）の学生も共同発表がプログラムに組み込まれていることは事前に知らされておらず驚いたそうだが、私のグループは熱心な学生が多く、日本側、ベトナム側の双方が限られた時間の中で積極的に話し合いを進めることができたのではないかと思う。

同世代の学生に対して戦争に対する考え方を問うアンケートを実施して結果を比較し、特徴的な違いについて、教科書を見せ合っての話し合いや、フランス植民地時代に抵抗した人々が収容されたホアロー刑務所の見学を通して考えた。そこで感じたのは、ベトナムにとっての戦争は常に自治を守るための、抵抗と革命の歴史だということだ。そもそも「ベトナム戦争」と日本で言われるのは、フランス、日本の支配やアメリカ、中国、カンボジアの侵攻など延々と終わらなかった戦争の一部に過ぎないのだと知った。また、教育では戦争教育が愛国的な意識を育むために行われ、戦没者が英雄として称えられるというのが、日本との大きな違いだと感じた。ベトナムの教科書では、活躍した人物が英雄として取り上げられ、その戦略や功績が説明された上で、最後にそれぞれの戦いからどのような愛国的な教訓が得られたかが教えられるそうだ。確かに、ホアロー収容所でも過酷な環境下で共産党員がどれだけ勇敢で忍耐強く革命の準備を行ったかが、音声ガイドで毎回説明されていた。対して、日本では戦前、戦中の軍国教育への反省から、明らかな愛国教育というのは行われていない。これは「戦争で愛国的な教育を受けたか」「戦死した兵士を英雄だと思うか」というアンケート結果にもはっきり現れていた。

一方、予想外の結果もあり、例えば、「生きている間に自分が戦争に巻き込まれる可能性があると思うか」という質問に対しては、平和ボケしているとも言われる日本の学生の方が巻き込まれる可能性を感じていた。また「国家間の問題解決に武力は必要だと思うか」という質問に対しては、平和主義の国で平和教育を受けている日本の学生の方が「部分的にでも必要」とする回答が多く、ベトナムの学生の方が「必要ではない」とする回答が多かった。この理由を考えていた時に、ベトナムの学生から「せっかく手に入れた平和を手放したくないから、絶対に中立的な外交をしているんだ」という話が出たのが心に残っている。社会主義の国とも資本主義の国とも

＜事務局使用欄＞受付番号：　　－

友好的な関係を築き、そのためにウクライナ関連の投票はすべて棄権していると教えてくれた。果たして日本には、せっかく手に入れた平和を手放したくないという思いがどれだけあるのだろうか。防衛費増額はじめ最近の議論を思い出しながら、そう考えさせられた。

今回の調査では日本語、ベトナム語それぞれのアンケートの回答数は91ずつであり、分析する際にも学術的な手続きからは色々と不十分な点もあったかもしれない。しかし、この共同発表の準備は自分の無知や当然視していたことについてハッと気付かされる瞬間の連続であり、異なるバックグラウンドを持つ人と交流することの意味を何より感じることができるものであった。難しいテーマだったが、挑戦した甲斐があったと思う。

ここまで、共同発表の内容を中心に学びを綴ってきた。ただ、この難解なテーマに頭を悩ませた時間は交流の一部である。USSHの学生もULISの学生も、自分たちの授業の合間を縫って、私たち日本の学生をご飯や観光に連れて行ってくれた。テーブルを囲み談笑するその時間にも心に留めておきたい気づきや発見がたくさんあった。例えば、「ベトナム料理といえばフォー」という私のイメージは完全に塗り替えられ、その料理の豊富さと美味しさにはただただ目を見張るばかりだった。私が出会ったライスヌードルだけで、平たいフォー、汁麺にも春巻きの具材にもなる万能な細麺のブン、ベトナム中部の麺料理ブン・ボー・フエ用の太めのブン、サトウキビが練り込まれたバインダーの4種類があり、牛肉、豚肉、鶏肉、海鮮など様々な具材と合わせて食べられる。普通に白ごはんとして出てくるComやおこわのXoiなど米を米粒として食べる料理も豊富で、少し郊外に出ると一面に広がる水田の風景に納得した。田んぼが広がる風景は日本にもまだ残っているが、米の消費量が年々減少している日本と比べて、ベトナムでは米食が依然として人々の生活に根付いていることが窺えた。

ちなみに、最初は衛生面を気にして小綺麗な店に入っていたが、ベトナム人の学生曰く「汚くて小さい屋台ほど安くて美味しい」らしい。もちろん衛生面に気をつけるには越したことはない。ただ、初めてUSSHの学生に連れて行ってもらった、豚肉の炭火焼きと肉団子のつけ麺「ブンチャー」のお店は、本当にここで大丈夫なのかと感じてしまうほど小さくて薄暗いところだったが、その一口目の感動は今でも忘れられない。ここで、「安さ」の感覚について思ったことも書いておきたい。先輩方の報告書にもあるが、やはり日本人の学生とベトナム人の学生では安さの感覚がかなり異なる。上述の料理の場合、日本円に換算すると150円や250円で一食が賄えるし、観光客向けのレストランでお腹いっぱい食べたとしても2000円程度に収まる。しかし、バイト代について聞いてみると、時給は通常150円程度で高くても250円だと話してくれた。交流をする上では、やはりそのことを念頭におかなければ知らないうちに無理をさせてしまうことになるため、早めに知ることができてよかった。また、現在日本に労働者として流入するベトナム人が増加していることの背景の一端を知ることもできた。ある料理屋では、もう15歳だといいながらどう見ても10歳くらいの子どもが働いていたこともあった。義務教育はいつまでなのかとベトナムの学生に聞くと「15歳までだけど、多分経済的な理由で行っていないんだと思う」と答えが返ってきた。十分な教育を受けることができなかった場合、日雇いなど不安定な職に就くしかない。結婚年齢も早いというが、それでは家族の生活を支えられるほどの収入を得ることはできない。技能実習制度で問題視される、多額の借金を抱えて日本に来るという状況は、このような教育の問題でもあるのだと感じた。

このように、本派遣プログラムでは、以前より抱いていた疑問や教育という自分の関心ごとについて考えを深められる経験をいくつもすることができた。現在は大学3回生だが、卒業後は報道に携わろうと考えている。ここで得た気づきや学び、新たな疑問、そして大切にし続けたい人とのご縁を自分の取材に活かし、それを通じて少しでも、多様な人々が大切にされ自分らしく生きられる社会づくりに貢献したい。